

No.105

公民館だより

平成10年8月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

ご挨拶

公民館長 酒田 治

由良岳に霞がかかり、今年の梅雨は何時になつたら明けののか、梅雨明けの待ち遠しい今日此の頃でございます。

でも皆様のお手元に、公民館だよりをお届け出来る頃、由良海水浴場も多くのお客様で、賑わいを見せていることを願っています。

この度、前館長の山下清一氏が、皆様ご承知の市議会議員選に立候補され、上位当選されたことは、公民館としても誇りに思っています。

立候補により辞任され後任として、私儀館長の職をお引受け

することになりました。

公民館活動も、年々多様化し、生涯学習・人権問題・等々いろいろな取り組みが要求されて来ています。そうした問題をとり組むなか、何と言つても地区の皆様と気軽に語り合える場を作つて行きたいと思つています。

もとより浅学、微力な者でございます。諸先輩同様、暖かなご指導・ご協力を下さいます様お願いし、新任のごあいさつと致します。



退任のごあいさつ

山下 清一

梅雨明けを待つ心は、何か忙しく、そして華やいだ気分です。

私こと、三月末日をもちまして、由良地区公民館長を辞任させて頂いたことになりました。

三年十ヶ月、長いようで短い期間ではございましたが、今日が迎えられましたのは一重に地区の皆様を始め、自治会長さま、運営審議会の皆様や、公民館役員の方々の温かく熱心なご指導とご援助によるものであり、深く感謝し厚くお礼を申し上げます。思えば私、多くの人々との出会いや、生涯学習の一端にふれることが出来たのも、人間の尊厳や、生涯学習の大切さに思いを寄せることが出

来たのも、公民館活動の中で得た貴重な体験のたまものであり、深く感謝しているところがあります。

公民館活動が生涯学習の拠点として皆様に期待されながら、今一つ創意工夫が不十分で、参加者等、充分その実を挙げるこ

とが出来なかつたこと、反省しているところであります。公民館活動が、地区の生涯学習の場とし、その需要が年々高まりつつあります。日々の出会いを大切にしながら、生き甲斐のある毎日を創造するために、明るい町、住みよい街づくりや楽しい行事の集りの提供等、由良地区公民館の更なる発展をお祈りしながら、辞任のごあいさつと致します。

平成十年度

由良地区公民館役員名簿

主事 飯澤 登志朗

【運営審議会委員】

(順不同敬称略)

由良小学校長 角尾 誠

脇 自治会長 有田 弘一

宮本自治会長 中筋庄三郎

浜野路自治会長 中西喜寿郎

港 自治会長 山田 武治

下石浦自治会長 山下 守

上石浦自治会長 山下伊左衛門

前公民館長・市議会議員

山下 清一

学識経験者 四方 寿朗

由良小学校PTA会長

小西 肇

栗田中学校PTA会長

大森 勝治

婦人会会長

三嶋 昌子

老友会会長

平間 克己

子供会連絡協議会会長

榎岡 典幸

【公民館役員】

公民館長

酒田 治

主事

飯澤登志朗

【分館長】

脇 分館長

佐原 善弘

宮本 分館長

升田 栄二

浜野路分館長

中西 英貴

港 分館長

川崎 直

下石浦分館長

野村 一雄

上石浦分館長

岸田 秀樹

【幹事】

(文化部) 部長

岸田 国彦

副部長

川崎 清

北野 隆雄

上良 広之

山本 良和

由利 昭弘

糸井 治孝

中西 伸子

大畑 忠夫

岸田 幸夫

山下 浩二

三嶋 昌子

枝川 春代

(体育部) 部長

山下 正貴

副部長

中西 一孝

副部長 山田 悦子

由利 典久 編田 一則

堀家多美子 中西 隆光

浜崎 利雄 小西 雅代

糸井 博之 有本 敬

有本 仁美 酒田 彰一

山下 均 柴田 尚子

山下まさ代 上田 町子

吉田あい子

小室 文雄 北野 薫

岸田 剛 玉垣 泰子

平成十年度事業計画

(文化部)

盆踊り大会 八月十四日

芸能サークル発表会 十月二十五日

文化祭(婦人会協賛) 十一月三日

四部対抗区民囲碁大会 二月七日

自治学級 二月十四日

生涯学習講演会(婦人会共催) 二月二十一日

由良歴史年表編纂事業 周年

「公民館だより」発行 四月・八月・十二月

「同和・人権教育」 指導者研修会 年五回

(人権学習会を含む)

(体育部)

由良岳登山(第三十二回) 四月二十九日

宮津市地区対抗駅伝競争大会 (第十回大会) 六月七日

四部対抗女子 キックベースボール大会 六月十三日

団体対抗ソフトボール大会 七月五日

四部対抗球技大会 (野球・ソフトボール) 八月十四日

四部対抗グラウンドゴルフ 九月十三日

宮津市市民駅伝競争大会 十一月三日

四部対抗バレーボール大会 (男・女) 二月七日

行事報告

主事 飯澤 登志朗

◎由良岳登山 四月二十九日
みどりの日にふさわしい快晴に恵まれ、総勢二〇五名の参加があり、事故もなく全員無事に下山しました。

コース共各地域の沿道で熱い声援を受けながら一本のたすきを受け継ぎ健脚を競いました。連日のトレーニング、大会当日のご健闘をいただきました選手の皆様そしてご家族の皆様、その他関係の皆様深く感謝を申し上げます。

いつ登つてみてもその景色はすばらしく、参加者の生き生きとした表情にこの登山をいつまでも続けていく責任を感じます。例年に亘り登山道整備にご甚力いただいております観光協会、民宿組合等関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

なお、選手団及び成績、並びに十回記念大会で受賞された方々を併せて報告いたします。

○一般男子

(選手団) 順不同

また登山に参加されました舞鶴市の中村さんからご感想が寄せられて居りますので、次頁以降に掲載いたしました。

奥田 政郎 泉 晶雄

◎第十回宮津市地区対抗

津田 一 新宮 鶴雄

馬伝競争大会

林 邦雄 千坂 幸雄

今年第十回記念大会として

中西 泰之 田中 昭義

実施され、南部コース、北部

中西 一就

○一般女子

中西美智代

前畑つかさ

中西美智代

前畑つかさ

前畑つかさ

四位 育友会

育友会

公民館

公民館

◎就任にあたり

主事 飯澤登志朗

新米の主事です。早速の失敗、過日のソフトボール大会はナイターでしたが始めてのことで優勝戦盛り上がったところで停電、点灯時間制に気付かなかつたのが原因でした。

両チームの熱戦に水を差す結果となりましたがお許しを！

不慣れと生まれつきの不器用で、これからも皆様にご迷惑をおかけすることと思ひます。

公民館活動も年々活動内容が変つていきます。行事消化型から個々人のレベルアップを図る生涯学習推進の拠点としての活動が求められているようです。

歴代の館長始め関係者の皆様

が、築いてこられた由良公民館

活動が地域の皆様一人ひとりに

役立つよう頑張つてみたいと考

えております。

育友会

食は心

宮津市立栗田中学校

校長 太田

勲

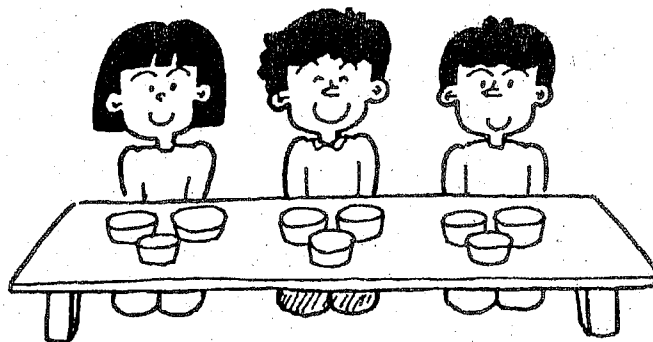
この度、栗田中学校の校長として赴任してまいりました太田勲でございます。今後、公私ともお世話になると思いますがよろしくお願いいたします。

さて、今日、子どもが変わったとか、子どもが分からなくなつたとかよく聞きますが本当でしょうか。私たち大人が分かるうとしないのではないのでしょうか。子どもがかつてに変わるということはありません。大人社会が子どもに反映をして子どもが変わっていくのです。現在、子どもたちの非行や問題行動が大きな社会問題となり、国を挙げての対策が考えられています。この問題は実は、私たち大人社会に潜んでいる問題でもあると思います。

「衣食住足りて礼節を知る」という言葉がありますが、はたして現在のこの言葉どおりになつていのでしょうか。「物」が豊かになつた反面、「心」が貧しくなつたといわれております。動物が子育てをするとき最優先にするのが「巣づくり」です。人間でいいますと「家庭」「づくり」です。子どもにとって安全で安心のできる「巣」を造るのです。これは親の役目です。「家(家庭)」「づくりのポイントはいくつありますか。一番大切なポイントは「食事」だと思います。家族がそろつて食事の始めと終わりに合掌して「いただきます」「ごちそうさま」ができているかどうかだと思えます。忙しさがこのことを奪っているように思えてなりません。家族そろつての

食事には感謝があります。会話ががあります。そして協力がああります。もちろん、今日の社会情勢の中で、各家庭ではむずかしい問題もあると思いますが、いま一度、食事の在り方を考えてみてはどうでしょうか。

終わりにになりましたが、栗田・由良両地区の公民館が、地域の生涯学習の拠点として、益々ご発展されますことをお祈りするとともに、地域に開かれた学校を目指して努力をしてまいる所存であります。



話し上手は聞き上手

由良小学校長

角尾 誠

「話し上手は聞き上手」という言葉があります。

「話し上手」の条件として、話しをする内容があり、話し方がうまいということが必要なものだと思います。しかし、それだけで「話し上手」とは言えません。

誰かと一緒に話をしていて、あの人の話は楽しいと思えるのは、実は自分の話をよく聞いてくれる場合である時が多い様です。

こちらのことをよく聞いてくれる、分かってくれる、その上で話を更に進めてくれる。それが、共に話をする楽しさになると思われます。こちらの言うことを相手に分かってもらえると嬉しいし、更に別の見方や考え方もあると言われれば、納得することもできると思います。

家庭でも、学校でも、そうしたことが当てはまるのではないのでしょうか。

子供が、家族や教師や友達の前で話をして、分かってももらえなかったときの喜びは大変大きなものです。

家族や教師は、子供の考えなどをよく聞いて、それを子育てや指導に生かしていくことが求められているのではないのでしょうか。それは子供にとって行動する意欲に、学ぶ楽しさにつながっていくものだと考えます。ところで、過日、保健室にきたある子が、先生に「ここ」と言つて腕を指し、薬を塗ってもらっている光景を目にしました。これとよく似たことで「先生おしっこ」とか「お母さん水」と言う子供が多いのではないでしょ

うか。

普段の生活の中で本来なら「何がどうした」とか「何が何だ」という文の形で、物事を順序立て、正しく話すよう教えられているはずなのですが……

由良小の子供達は、大変挨拶がよくできるようになりました。このことはよいことです。それからこれも習慣付けていくことが大切です。しかし、その反対に「ご飯」とか「水」とか「うん」、或いは「べつに」という赤ちゃんの話し言葉のような短い単語で用を済ませるのは決して話し上手にはなれません。

単語だけの会話を続けていたのでは、いつまで経つても表現力は付いてはいきませんし、豊かにもなりません。文の形で話すことが大切なのです。

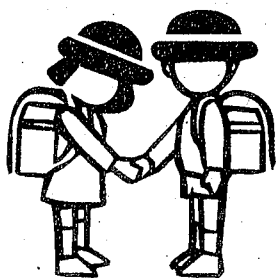
平成八年度より由良小学校において、話し方を意識させよう、そして、表現力を育成しよう、という目的で話型指導に取り組んでいます。(平成九年四月号で

お知らせしました)

先日、四年生で算数の研究授業が行われ、二年間の指導の成果に注目していましたが……です」「……と思います」「……さんと同じです」としつつかり文の形で表現できていました。

保護者・地域の方々も子供の表現方法に今一つ関心を持っていただき、大人自らが一つ一つの言葉に意識を持ち、正しい表現の見本を示していただければ、更に表現力が豊かな子供に、又、話し上手な子供に育つていくと思えます。

今後とも、ご家庭・地域の方々のご理解・ご協力をお願い致します。



雑感

婦人会長

三 嶋 昌 子

平成十年度婦人会長という大役をお受けする事と成りました。微力乍ら会員の皆様を始め、地区の皆様のお力を借りし乍ら一年間勤めさせて頂きたく思っております。

近年の青少年の凶悪犯罪、益々悪化する環境、急速な高齢化社会への突入等、私達を取り巻く問題は益々深刻化し、時代の目紛るしい変化にどう対処して良いのか分からないのが現状ではないでしょうか。特に多発する青少年の非行は私達母親には心の痛む問題です。

「今の若い者は」と少年達を責める前に、その子供達が手本となる大人達が一体どうなのか？反省しなければならぬ点も多く有る様な気がします。青少年育成の根本はやっぱり家庭だと

思います。例えば子供は親を乗り越えるべく努力します。親も又子供に乗り越えられない様に、尊敬される親になる為に一生懸命努力をしなければなりません。その姿を子供に見せる事が出来ればきつと良い親子関係が保て、その中から厳しさも教える事が出来るのではないのでしょうか。

又、地域の子供は地域で見守るといふ気持ちで地元のみならず気が付け、気が付けば注意が出来る、注意してもらえ人間関係を作りたい物です。

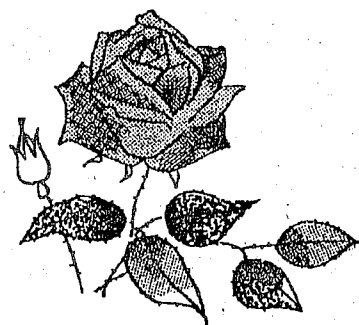
忙しい生活の中ですが少しでも機会を見つけれ外に目を向け多くの人々との交流の中で勉強し理解し、広い気持ちで前向きに日々の生活をして行きたい、婦人会がその勉強の場であって欲

しいと思います。

情報化時代に流されて自分を見失う事のない様、すべての事に対し「自分は」と云う主体性、「自分が」と云う積極性、「自分も」と云う協調性をもって行動する様にしたいものです。

しかし、女性が勉強するためには、家族の協力なしでは不可能だと思えます。どうか家族の皆様が大きな心で見守って戴きたいと思えます。私達もそれに甘んじる事の無い様少しでも良い家庭、良い地域を目指して頑

張りたいと思えます。どうか皆様の御指導、御協力をお願い致します



平成九年度

「人権標語」入選作品

ゆう気出せ 君も言えるよ

「いや」「やめろ」

由良小三年(当時)

北野 加奈子

心身ともものびのびと

由良子供会連絡協議会会長

柘 岡 典 幸

日頃より由良子供会の活動に
対しまして、ご指導ご協力を賜
り厚くお礼申し上げます。

子供達の夏休みも間近かに迫
り、今年も諸行事が予定されて
おりますが、夏という季節は子
供達にとつてかけがえのない経
験をさせてくれる季節ではない
でしょうか。学校に通う日々、
思っているもなかなかできない
ことや、友達と一緒にやって何
かにチャレンジしたいこと等、
思い切つてやりたいことをやれ
るのが、夏休みのよさだと思ひ
ます。

思い起こせば私が小学校高学
年の時、友達数人だけで、当時
私は舞鶴に住んでいましたの
で、青葉山に登つたよき思い出
があります。自宅から十キロぐ
らいの道のりを、みんな買つて

貰つたばかりの自転車で、松尾
寺まで一度も休まずに急ぎまし
た。

お寺の清水で喉を潤すと、我
先にと頂上をめざしました。苦
労して登つた頂上からの景観
に、みんなと一緒に感動しあつ
たことは今でも忘れることはで
きません。

今の子供達の環境は、時代の
流れとともにやりたい事が素直
にやれない難しい面がありま
す。子供達自身が本当にやつて
みたい事、心身ともにのびのび
と夢中になれる事が、大人達の
都合や制約の中で押しつぶされ
てはいないでしょうか。

子供達だけではなく我々大人
の社会でも、色々と厳しい環境
の中で、子供達に対していい影
響を与える様な余裕や自信が失

われつつあります。

今一度、子供達の置かれた環
境や日頃親としてどういう思い

で子供達と接していけばいいの
かを、真剣に考えるべき時では
ないでしょうか。

第十三回人権学習会

(前回一〇四号のつづき)

酒 田 治

人権学習会における、標題「い
じめと差別、あらゆる問題」につ

ときは悪質な加害者に変身す
る。

いて、市教育、内田先生の講演
で、前回一〇四号に「いじめ問

◎同和問題は、生まれ(生まれた
所)を問題にする。

題」の報告のみに終わりました。
今回「同和問題」について報告さ

◎何の理由や原因がなくても、
その地域全体の人を排除する。

せていただきます。
◎イジメと差別の共通点と相違

◎世代を越えて、子や孫へと続
く。

点。
◎命に関わる人権問題である。

◎結婚について。
●「憲法二十四条」では。

◎被害者、加害者の他に傍観者
(観衆)がある。

婚姻は両性の合意にのみ基づい
て成立し・・・とあります。宮津市

◎傍観者(観衆)でいて、何もし
ないことは加害者と同じであ

の意識調査(平成八年十月)によ
りますと。

◎加害者側は、理性的ではなく
「偏見」にこり固まっている。

●同和地区の人と地区外の人と
の結婚についてあなたはどうか
われますか。

◎傍観者も、被害が自分に及ぶ

(A)親として子供に結婚問題が生

じたとき。
(1)子供の意思を尊重する。 ……五一%

(2)親としては反対するが、子供の意思が強ければ仕方がない。 ……四〇%

(3)家族や親戚の反対があれば、結婚を認めない。 ……九%

(B)自分の結婚問題が生じたとき。(1)自分の意思を貫いて結婚する。 ……四二%

(2)親の説得に全力を傾けた後に自分の意思を貫いて結婚する。 ……四七%

(3)親や親戚が反対したらあきらめる。 ……五%

(4)結婚相手としてはあきらめる。 ……五%

◎新しい結婚の在り方を追及する若者が増えています。

●仲人を立てない。

●案内状は二人の名前で。

●大安などに拘らない。

●挙式・披露宴も工夫して。

以上、昭和四十年に同和対策審

議会答申が出され「差別をなくすことは国の責務であり、同時に国民的課題である」と明記され今日まであらゆる努力がなされて来ましたが、宮津市の意識調査で出ているとおりです。
公民館も毎年一月、人権学習会を開催しています！あなたも！是非、参加をお願いします。



第一〇回

宮津市地区対抗駅伝競走大会に出場して

由良駐在所 奥 田 政 郎

三月一八日付けにて、宮津警察署由良警察官駐在所に赴任して来ました。

私の警察人生でも経験したことはない駐在所勤務、そして家族四人、地域住民として由良の地でお世話になることになりました。

引つ越しの荷ほどきも間もなく落ちつくやいなや、公民館長、自治会長の各氏より第一〇回宮津市地区対抗駅伝競争大会の選手として参加して欲しいとの依頼がありました。二つ返事で「はい」と答えたものの、この駅伝は南部コース九人、北部コース六人の合計一五人からなる地区の伝統対抗駅伝であり、由良地区は優勝経験もありその代表として出場させてもらうことの重大さを日増しに感じながらの毎日となりました。

そしていよいよ大会当日を迎えました。幸い好天に恵まれ、南部第二区で小学生からタスキを受けた時には、一本のタスキの重さをあらためてズシリと感じました。

私は中学、高校、大学と陸上競技をして来ました。しかし公道を走るのは一〇数年ぶりであり、緊張とともにどこか童心に返ったような気持ちで奈良海岸の三・九皿を清々しく走ることができました。そして今まで忘れかけていた充実感にひたることもできました。

このすばらしい機会を与えて下さった公民館長、自治会長の各氏に、そして応援して下さいました住民の皆様感謝しております。

警察活動はもとより、この由良地区の住民としてもがんばって行きたいと考えています。

駅伝

由良小学校五年

山田 裕 喜

「やっと終わった。」
これが、走ったあとの最初の感想です。

はじめはかるい気持ちでしたら、お兄ちゃんから「タイムもはかられるし、しゃべるとつたらあかんし、タラタラするなら人のめいわくやで行くな。」といわれた。

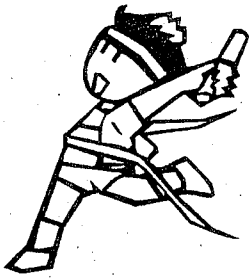
でもぼくは、けんちゃんや、しんちゃんと走れたかった。

「どんなもんかな。」と思ってグラウンドまで行くと小学生しかいなくて、これなら大じょう夫だと思っただけお兄ちゃんのこととおり、なまやさしいものではなかった。何日かするとかかとの辺が歩くのもいなくなつて、お母さんに病院まで連れて行ってもらうことになつた。でもぼくは走りたかった。

そしてお兄ちゃんが去年走つたところを走りたかった。

六月に入つて八区に選ばれた時は「がんばつてよかった。」と思つた。

駅伝の日、三位で新宮のおつちゃんが走つて来るのが見えた時、「よし」と思つたら足がふるえた。おつちゃんが「たのむぞ」と言つてタスキをわたしてくれた時は「ぬいてやる。」と思つたけどそのまま三位だった。でもぼくなりになんがなつたからか気持ちよかつた。来年もまた走りたいです。



駅伝に出場して

松林 裕 輔

ぼくはこの駅伝大会に出場しました。今まで由良地区の一区を応えんしてきましたが、今度は自分が走れてとてもうれしかったです。五月の十日ごろ、出場できるかまだ分からないまま練習に参加していました。

学校の宿題はいつも終わるのが八時なので、終わった後にすぐやっていました。

休んだことは一回しかなかったのですが、筋肉痛になることが多かったです。

六月の二日ごろ駅伝に決まりました。

「二区に松林君」と言われて、とてもうれしかったです。しかも、じもとを走れるのでとてもすごいと思ひました。

そして、本番当日の日にほかの人は開会式に出てぼくは由良

に残つて、二区を走る奥田さんと一しよにアップをしていました。だんだん時間がたつにつれて、人が増えてぼくの友達も応えんにぎてくれました。

しかも、一区を走る人の中で知り合いの人もいました。そのためますますきん張してききました。

スタートしました。ところがぼくはけつこうスピードを出しすぎてしまつたし一番最後でした。自分でまずいと思う中なんとか、一人ぬかしました。ぼくの結果では十一人中十位でした。全体の成績はなんと四位でした。

この駅伝に出場してとてもうれしかったし、宮津は長きよりの速い人が多いと思ひました。

また、出れる時があつたらがんばつて走りたいたいと思ひました。

由良の皆様こんにちは

中村 禮子

(舞鶴市上安)

由良岳登山の日からもう二ヶ月半も過ぎてしまいました。心に深く刻まれたあの日の思い出を呼び起しながら筆を執らせていただいております。

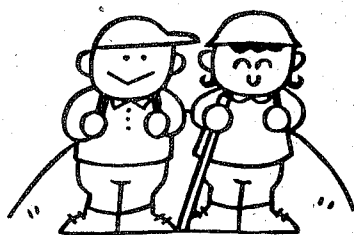
由良の友人からのお誘いで私は舞鶴からこの行事に参加させていただきました。当日、皆さんから暖かく声をかけていただき、大変心地よく楽しませていただきました。私達のグループは五才から十、二十、三十、四十、五十才代と年令巾が広く、しかも外国の人まで含めた総勢十名でした。当日登山された方々の中にはヒゲ面や日本語を話す大柄な外国人やトムクルーズ張りの人等々、記憶の片隅にあるかと思えます。実は私達は中舞鶴に在る京都大学、水産実験場の職員や学生等々で

す。外国からの方々のうち、人はアメリカ、ニューハンプシャー大学大学院修士課程二年生で、四月から四ヶ月間、日米共同研究のために来られています。彼は山歩きが大好きで日本滞在中にこのような機会に恵まれましたことを本当に喜んでおりました。もう、すでに帰国されましたが、短い日本滞在中の素晴らしい思い出となりました。もう一人のアメリカ人は舞鶴市の英語指導助手で、あと二週間で二年の任期を終えて帰国されます。彼は日本の自然の美しさと、山登りに御年輩の方々が参加されていることに深い感銘を受けたと話してくれました。

由良では公民館がこのような行事に取り組んで、住民の皆さま

の“和”を大切にしていると聞き素晴らしいことと思っております。私達夫婦は仕事の都合で色々な国へ行ったり、住んだりしていますが、特にこの辺りの雄大で繊細な自然の美しさに大変魅力を感じています。由良岳登山の日の山頂からのパノラマ、幾重にも重なる山々のシルエット、そして眼下の大海原、何と豊かな自然に恵まれた御地であろうとすらやましく思います。このように山と緑と水の豊かな土地はこの地球の上でそう多くないことも理解しております。水場でいただいた美味しい水、下山途中でヨーロッパの光景を思わせてもらったり、みかんが育ち、酒作りが行われたり、人々が豊かに生活できる地という深い印象を受けました。そしてさらには子供達が帰りに浜でワカメ採りのオマケまでいただきました。海からそびえ立つ由良岳の雄大な姿に自然の神を感じそしてそれに守られてい

る皆さまの生活を想像いたしました。いつまでもこの素晴らしいを保っていたきたいです。グループを代表して由良の皆さまに心より御礼申し上げます。メンバー一人一人がそれぞれに良い思い出を作っていたいただきました由良岳登山。二度と同じメンバーが集まることはむずかしいですが、この思い出を皆で語れる日が必ず来ることを信じています。また来年も是非参加させていただきますたく思っております。皆様の御健康をお祈りいたしますと同時に再会できます日を楽しみにいたしております。



川柳

詩

坂本 妙子

誰が掛けたか前垂れを

羽化登仙幸せの俣このまんま

地藏さんすまして並んでる

水中花汚れを知らぬ俣褪せる

香の煙に目をほそめ

捨てきれぬ欲が自分を縛りつけ

丸い頭に水かけられて

山下 節子

せつかくの前垂れぬれている

政治への不信選挙で色あらわ

まだまだ残暑はつゞくけど

期待をばしないと云いつゝ投票す

地藏さんはお盆が大好きだ

無党派は得体の知れぬモンスター



五十嵐源三郎

由良に住んで四十年

思い出すままに

四方 寿郎

私ที่บ้าน内の父井土巖の後を受けて、由良川河口の現在地に開業したのは昭和三十三年二月一日で、早や四十年の月日が経った。此処は以前大森寅一氏の住宅で、それ以前は倉庫が建っていたそうだ。間違いがあれば教えていただきたい。それまで神崎で開業していた井土が由良村の強い要請を受けて、この地に移り住んだ。昭和六年、当時宮本の旧公民館、現在の如意寺の駐車場に野瀬という医師が住んでおられた。相当お年寄りだったのだろうか？今なら問題だ。

昭和三十年頃、拙宅の裏はすぐ海で、シジミがたくさん取れた。少し川上の山元製材所―昭和四十七年九月の高潮で倒壊―には船着き場があつて、大きな船で材木が運ばれて来るほど水深があつた。そのため格好の釣り場にもなつた。私も一念発起朝五時に起きて二時間黒鯛釣りに挑戦したが、全く何も釣れずに終わった。以来釣り竿を握つた事がない。当時は雨が降り続いて由良川が増水すると、家のすぐ裏を恐ろしい勢いで濁水が流れた。また当時此処は神崎からの渡船の船着き場でもあつた。私も一度神崎への往診に乗せてもらったことがあるが、船頭さんが懸命に櫓をこいで往復四十分、神崎では勿論患者まで歩いた。気の短い私は、一回でこりこりし二度と乗らなかつた。

昭和二十八年から四十年頃までは、梅雨時や台風シーズンに洪水の被害が多発した。その対策として昭和三十五年十二月大野ダムが完成した。河口でも製材所裏から同志社臨海学舎の下まで、岸から川の中央に向かつて四列ばかり、テトラポットが並べて沈められた。神崎側も同じように。それが見事に効を奏して次第に砂が堆積し、鉄橋から下に今日のような川岸ができた。この頃はまだ由良川上流の治水工事が不十分だったので、出水の度に大量の土砂やゴミと共に木切れや材木のような物まで、流れて来て浜へ打ち上げられた。風雨が治まると由良の人は競つて薪になる木を集めた。当時はガスは無く、灯油も普及していなかつた。薪は山で採るものとはばかり思っていた私は大変驚いた。

戦後の経済成長の始まりで公共工事が盛んになり、コンクリートの材料として由良川の上流では砂利採取が、河口では砂の採取が行われた。最初はトラックにスコップで積み込んだり、船へ板を渡して天秤棒で担いで運んでいた。そのうち、需要の拡大と共に新兵器が登場した。船のポンプで海水と一緒に砂を吸い上げての採取と、ベルトコンベヤーによる積み下ろしである。このような船が由良に四艘、神崎に七、八艘あつた。そのうちに由良川上流の治水工事が進み、大水が出て土砂がこれまでのように下流に、流れて来なくなつた。そのため海岸の浸食が急激に進み、海水浴場としての存立も危うくなつた。自治会が中心となつて由良海岸侵食対策委員会が組織され、「海岸侵食は河口の砂採取のためだ。直ちに砂の採取を中止してほしい」と建設省福知山事務所へ何度も要望したが「河口が閉塞すると船の航行が不能となるので、中止出来ない。又、海岸の砂が河口へ移動するかどうかは調査しなければ分からない」との返答だつた。そして昭和四十七年九月高潮による

大きな被害で、由良地区民の不満は爆発し、由良での砂の採取は自然に中止された。

その後由良の海岸にテトラポットの離岸堤が構築され、浜は甦り現在も小康を保っている。なお由良海岸の護岸堤防は昭和四十年に完成した。それと共に駅前の旅館の新館などが海岸の堤防沿いに建ち並び、その排水が浜へ流れるようになった。また河口でも直接川へ注いでいた家庭の排水が、岸に広がった砂浜を通るようになり、白砂の浜に雑草が繁茂し、河口では灌木が生い茂り、やがて小さな森となり鶯や野鳥の格好の住家となつてゐる。草むらにはコオロギや鈴虫などたくさんのお虫が住み、私達の目や耳を楽しませてくれる。

を食いつくし、わが家の柿の木に移動してきた。耳を澄ますと恐ろしいことに葉を削る虫の音が、しとしと降る雨音のように聞こえてきた。叩いても潰しても殺虫剤をかけても、最早人力ではどうにもならない。遂に国道を越えて港の児童公園にまで飛んだ。宮津保健所の調査でアメリカシロヒトリガと判明した。毎年こんな騒動になつてはと涙をのんで二本の胡桃を伐つてもらつた次第。

恐らく何処か由良川の上流から種子が流れてきて根付いたものだろう。私の生まれた福知山市の故郷の小さな川も、私市を経る由良川に注いでいる。

島崎藤村の
名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実ひとつ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

の詩に似て、私もこの由良川の河口に住み着いた身である。ついでに、このまま日本海への散骨で果てることを望んでいる。

渚に

小室 尚相
(柏市)

参院選挙は自民党の大敗で終わった。「ノー」と云えない日本人が、長引く不景気と、国際社会における日本の地位の低下などで、強い危機意識を感じた有権者が「ノー」と決めつけた。日本の民主主義も捨てたものではない。

これより一カ月前、山下清一君が、市議会議員に第三位で当選した。誠に快挙であり、祝福する。

私は清一君と、由良小学校の同級生である。勉強の方はどちらが上であつたかとなると、双方ともに「ワシの方が上だつた」と譲り合わないことになるので、この点は同程度であつたことにしておこう。

ただ、彼は他人に対する思い遣りと、統率力については、抜

群であつた。

そのことから彼は、クラスでの渾名(あだ名)が村長である。このあたりから判断して、市議員は彼にとつて、ピツタリと云えよう。

私達の小学校時代は、今から五十六、七年前になる。

夏休みになると毎日由良の海岸へ素足で海水浴に行つていた。昔の海岸は防風林の役割をする松の木が並木になつていて、今の汐汲苑の辺りもそうであつた。この松の木から海まで一直線であつた。

「アチーアチチチ！」

太陽の熱で砂浜が焼けていて、浜の砂がとても熱い。

カンカン照りの夏、松林の木の陰を出て、渚まで辿り着くまでに、先ず二十米程先の草むらに

向かって走る。

この草の上に立つて、足の裏を一時的に冷やす。

第二のコースも草むらを見つけて走る。この草が浜ゆうであつたかどうかは、小学生の知恵では解らない。

昔は浜の中間に葦簾(よしず)張りの浜小屋が建つていた。今の海の家である。

第三のコースは、その浜小屋の軒下をめざした。小学生の足では、どうしても歩数がかかると。足の裏が燃えそう。

第四のコースは浜小屋から海まで。渚の近くになると、もう草は生えていない。

小屋の、ラムネ、サイダー、カキ氷などを横目で見て、いざ海へ。今度は少し距離が長い。途中で足が、熱いから、痛いに変わってきて涙があふれる。

「イテエー イテエー」
泣きべそをかきながら、海へジャボン。

昔の由良の浜の長さは、百米

近くあつたのではなからうか。今はもうない。

話は変わるが、現在の日本経済は「ビツクバン」に移行してから大不況に突入した。

戦後最悪の経済と金融危機に直面し、国民は、もう打つ手のない橋本首相の政権運営を明確に拒否した。

これは次の政権に期待するとして、今、我々の住むこの地球は創世期に大爆発をくり返した。これをビツクバンと云う。

すべての経済活動は、最終需要家の利益に奉仕すべきであるというのが、アングロサクソン型の市場経済といつてよい。金融ビツクバンもその例外ではない。そのため各銀行がお互いに競争し、貯蓄者にとつて有利な金融商品を開発し提供することを考えてくる。

現在、日本は世界一の貯蓄国であり、その総額は一二〇〇兆円に達している。

これを狙って、海外の銀行が日本に上陸してくることは間違いない。

英国もビツクバンを十年前に始めたが、その間、外からの圧力で銀行がバタバタと倒産した。しかし、現在の英国は、シテイの景気は様変りに良くなつてビツクバンが成功した。

今の日本経済は、丁度、夏の太陽がキラキラとした由良の海岸の砂浜を熱い熱いと云つて歩いていけると同じである。目の前には大海がある。これを通り抜けると好況は必ずやつてくる。

もう少し辛抱していれば、由良の海水浴客も観光客も増加してくると思えますので、はいそれまでです。



由良を想う

岸田 広

(京都市)

由良を離れて既に三十数年、
今では帰省する機会も少なくな
り、思い出すことも不鮮明にな
りつつありますが、由良の「山
河」だけは憶い出すことが出来
ます。

た梅雨時や、山頂付近に二、三
回のうつつすらとした冠雪があり
しばらくすると冬が到来すると
いったように、この山の様子を
見て季節を感じとったものです。

由良小学校の校歌にも、
一、朝日に映ゆる由良の嶺
萬波はるけき日本海
正気溢るるこの里に
生い立つ我ら幸多し

高は六四〇米で三角点は右側の
なだらかの峰にあり、こちらの
方が僅かに高いようです。(由
良岳は、由良川の鉄橋の長さに
ほぼ等しいとされております。)

二、秀づる山の姿もて
果てなき海の心もて・
と綴られています。

小学校の低学年で、口移しに
教えられた文語調の歌詩は難解
で、由良の風光が歌に込められ
ていることが理解できたのは、
ずっと後のことでした。

この高低差を補う意味もあつ
てか、左の山頂に虚空蔵菩薩の
祠があり、由良神社社殿の裏手
には遙拝のための小さな標石が
ありました。今もあるのだ
でしょうか。

私達は、眼前に迫る双峰の由
良岳の山腹に雲が低く垂れ込め

私も、数回この山頂に立ちま
したが、三六〇度の眺望は格別
で、後年、京都に勤務するよう
になって、この由良岳の自慢話

につい口が滑り、秋の空気が澄
んだ日には遠くソ連(当時)の
ウラジオストックが見える、と
まで言ってしまった。

ところが、噂とは恐ろしいも
ので、このことが文部省の某課
で一時評判になり困ったことが
ありました。汗顔の至りです。
それにしても、地図の上で見
るととんでもないことですが、
海拔〇米から佇立するどつしり
した山容を、下から見上げると
つい信じたくなるものらしいの
です。

しかし、一番印象深いのは、
やはり白砂青松という言葉にふ
さわしい海岸で、昔から丹後由
良海水浴場として有名でした。
春の眠くなるような穏やかな

海、夏の海水浴客で賑わう海、
秋風が立ち海水浴客が去って急
に静かになった物淋しい海、冬
の蒼鉛色の雲を映した海―四季
折々に変える表情を見ながらの
散策は、浩然の気を養うにふさ
わしい場所でした。

渚を歩く足元を注意深く探す
と、一〇〇種類近くの貝殻を見
つけることができたものです。

つい先日、テレビの映像で神
崎側から由良の浜のやせ細った
様子を見ましたが、かつて由良
川の河口付近には子供の野球に
は広すぎる砂浜があり、終戦直
前にはグライダーの滑空訓練さ
え行われておりました。あの砂
はいったいどこへ行ったのでし
ょうか。

新聞報道によると、全国の自
然海岸の比率は約五五%で、消
波ブロックなどがある半自然海
岸は一三%強といわれておりま
す。由良の海岸もこれ以上浸食
されないようにと祈るばかりで
す。

以上、由良のことについて、
何か書くようにと依頼をうけ、
わずかな記憶を頼りに書きまし
たがまとまりのない文章になり
ました。乞ご寛恕!

征きゆきて還らぬ

中西夏江

今夏、五十三回めの敗戦記念

日がめぐつて来る。二十世紀前半、第二次世界大戦ゆえの「征きて還らぬ」死、国の為に殉ずるといふ、まさに忠実の死があつたことを忘れてはならない悲痛の八月十五日である。

その尊い犠牲によつて築かれた平和の有難さを改めて思い、かみしめ、不戦を誓い、願う日である。

大戦中に英霊となられた郷土由良の百七柱(人)のみ魂とご遺族の皆様にご心からの追悼と深謝を捧げねばならないと思う。

この中には、「花もつばみの若桜」と歌われ、讃えられ、二十の春を迎えることもなく、兵役中病に斃れ、また、戦場に散つた五柱(人)の若き英霊が、ご遺族に護られて在天する。遺影には、一途で清純な少年の表

情が生き生きと輝いている。

ひたすら護国の柱たらんと若い生命を捧げ、逝つてしまわれた昭和十九年、二十年の悲壮極まる事実は言語を絶して、さびしい。

今回、ご遺族の深いご理解と温かいご協力を頂き、ここに紹介させて頂いた。——忘却の彼方に消えてしまわないことを祈りながら——。

ひとすじに

加藤次男様(中西つた子様の弟様)

昭和十九年、京都府立舞鶴中学校を四年生で卒業。本来なら昭和二十年に五年生で卒業のところを、優秀な能力を見込まれて抜擢され、広島県江田島の海軍兵学校へ入学。誠直な次男さんは、降雪激しい夜半にも短艇の降雪作業など、苛酷なまでの軍事訓練と綿密な教科学習に努

力。(海軍では、敗戦の必至を認知していた為、予想される敗戦後の日本国家再建を、この江田島兵学校の学生達に、その核となるべき幹部育成の教育も行つていた)

身体の不調に気付きながらも、忍耐強く教練を続けていた次男さんは、遂にその病重く昭和二十年八月に帰宅。その時の「残念です」の一言は熱く沈痛である。同年十月七日、惜しくも、十八才の加藤海軍少尉の生涯は閉じられた。

ご両親は、九州まで知友を訪ねての聞き取りや、生後間もない赤ちゃん(現・中西一雄さん)



に、次男さんの軍帽をそつとかぶせて「あの子の生まれ変わりのようだ」と涙されたと聞く。その親心は筆舌に尽くし難い。以下四柱の方々のご両親、ご兄弟の痛哭もお察しするに余り有る。

「ああいう人になりたい」と一学年上の次男さんに憧れたと

いう大森孝さんの話によると、次男さんは、小学校時代から特に器械体操に優れ、当時の嵯峨先生の指名で、見本、所謂、模範演技をされた由。舞中時代は共に汽車通学で、口数は少なかったが、真実味のある人という印象が強く、学科もスポーツも優秀である次男さんを常に尊敬していた——等、回想は薫風のように歳月の川を渡つて来る。

海行きて

大森正一様(大森義雄様の兄様)

昭和十九年徴兵。肩に赤い襷をかけ、歓呼の聲に送られて由良駅頭を出征。

この頃、日本は敗戦への道をたどつていた。その為、旧兵法では、満二十才の徴兵を、昭和十九年には、兵役徴集年限を十八才に引き下げ、入営者を多くした。

正一さんは、入営後の便りに「桜の咲く日」や「夏の軍装で戦地へ行く」事を書いておられた由。南方前戦への訓練中、民

家からの投函だったと義雄様は仰有る。

昭和十九年十一月十七日、戦死。場所は、濟州島付近。輸送船で渡航中に米軍の潜水艦に攻撃され、十九才の正一さんは水漬く屍となられたのである。

濟州島は現在、チエジユ(濟州)島と記されて、対馬海峡、朝鮮海峡を超えて東シナ海にある。当時は日本の領海であった。

「きけわだつみのこえ」の一書にも、昭和二十年四月、濟州島沖で戦死の出陣学徒の記事がある。日本の輸送船が度々、攻撃された悲惨さを痛感する。



「正一さんの遺骨を迎えにくるように」との通報で、宮津のお寺まで出かけ、「遺骨箱には何も入っていない」と聞かされたという事実。当時は、土葬であった為、そのまま墓地に埋葬。戦死の公報が届いてから、相当の日月を経っていたということである。

その後、三、四年も過ぎてか

ら、正一さんの生存説が伝えられ、「もしや？」と期待する。両親は、あちこち尋ねられたとのこと。しかし、それは結局、噂のみで、生存説は、むなしく消えてしまったのである。

敗色濃厚な時期に、その戦地に若人を赴かせ、空の遺骨箱で終わらせる——戦争とはこの上なく非情なものである。

夕紅

中西庄三郎様(中西健之上様の兄様) 昭和十九年九月、陸軍現役志願兵として、中部二十七部隊(京都伏見連隊)に入隊。約一週間後に面会あり、即時、北支派遣となり、現地で軍事教練。

「短い面会時間が終り、別れる時が来た。家族の者が営門を出るまで、いつまでも手を振って別れを惜しんだ姿が今でも眼前に浮かんでくる——。」と健之上様は感慨深く、終の別れになった淋しさ、虚しさを回想される。

昭和二十年四月十六日、中華民国湖北省、武昌第一五九兵站

病院にて戦病死。この間の苦難は、軍事郵便の検閲ゆえに語られることなき葉書の文面であった。

「愛国行進曲」 「日の丸行進曲」 「上海だより」 「麦と兵隊」 数えあげればきりが無い程の軍歌(昭和十二年〜二十年まで)の中で育ち、励まされた少年達は、自ら兵役を志願。はてなく青い野の風に今日から……

と、大陸の戦野を雨の日も進軍、志燃えて、尽きた庄三郎さんだったのである。

軍国教育は悲愴である。



「自分も志願しようか」と言う弟さんに、「お前はやめるように」と、一家のことを考えて諭された兄としての庄三郎さんの言葉は、いつまでも重い。

風の窓

大森忠治様(大森秀朗様の兄様)

昭和十六年四月一日、舞鶴海軍工廠見習(造機部員)として

勤務。

昭和十八年十二月、第八期海軍予備補習生(工作科)を、同時に舞鶴海兵団に入団を命ぜられる。

昭和十九年三月、海軍予備員に採用され、海軍上等工作兵、充員召集を命ぜられる。同時に、海軍工作学校に入校、講習員として努力研鑽中、病気により、横須賀海軍病院に入院。

その後、舞鶴海軍病院(現・国立病院)に転院「舞鶴海兵団に送籍」となる。

昭和二十年四月二十七日、同病院にて死亡。十八才七ヶ月。

以上は、忠治さんの履歴書からの抜粋である。父上の金蔵氏が大切に保管されていたもので、半世紀をこえたその書類は、丁寧に折り畳まれて古色感無量である。

少年期の四年間を舞鶴海軍に籍を置き、それこそ粉骨碎身の忠治さんであった。健康な身体が、思わぬ病魔に犯され、どん

なにか残念であつたらう。真摯なる人ゆえに悪夢に襲われたとしか思えない。

このことは、庄三郎さんについてと同様で、病窓から眺める山河や鳥、行く雲や星空...故郷に寄せる想いは、いかばかりか。



心志半ばにして病床に臥す辛苦は、厳しい軍律の中では、沈黙の伸吟だつたに違いない。

ああ、言葉に窮する。

つばさ、切々

坂根俊夫様(坂根虎一様の弟様)

昭和十六年五月一日、海軍飛行予科練習生として、茨城県土浦、霞ヶ浦航空隊へ志願入隊。後、横須賀、松阪、小松島、鹿児島へと移動。昭和二十年六月九日、沖縄県外特攻隊として、沖縄周辺敵艦船夜間攻撃の任で、奄美大島古仁屋基地発進、戦死。十九才。俊夫さんは二人乗りの飛行機

の操縦士であつた。

大空への夢を託した紅顔の少年、聡明だつた俊夫さんの当時の飛行訓練の写真は皆、にこやかであるが、やはり張りつめた雰囲気を感じられる。虎一様に見せて頂いた俊夫さんのアルバムや、同期生存者作成の名簿も、二十世紀の証である。忠治さんの履歴書もまた、同様である。短い生涯を予感させる葉書に



は、「もうすぐ由良の桜も散る頃でしょう」と書かれていた。

昭和二十一年遺骨帰還。

凱歌ならざる使命を果たすことのみ、死の操縦桿をぐつと握りしめ、高鳴る胸で、どんな愛機?で、俊夫さんは飛び立つたか——やがて、翼を染めたであろう紅の血。その夜、月の空ではなかつたろうか——友よ。つばさ、切々——。

何ものにもかえ難い大切な生命が、不合理な戦争によつて奪われ、沈み、消えていった無念さ。青春の胸には、将来への人生設計があり、まだまだ生きていく生命が必要であつたものを。

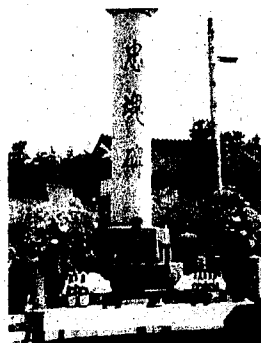
敗戦という日本歴史の転換の蔭に、このような犠牲が如何に多かつたことか。今生の平和の礎が、戦死者達の賜であることを繰り返したい、そして伝えたい。

上述の英霊五柱は、私の小学校時代の顔馴染みの方々である。

次男さんは二学年下、正一さんと庄三郎さんは一学年上、忠治さんと俊夫さんは共に机を並べた同級生。みんな純情で真面目少年であつた。また、そつと救いの手をさしのべて下さる優しさもあつた。良き学力と健康な心身を持ち、生まれ育つたこの由良の自然とよく融和した少年同士であつた。「いま、生きて在らば——」とご遺族、友人、私達の胸に去来する万感は、今日も夏空へ発つ。

この一文を書かせて頂くに当つて、ご遺族をはじめ、新宮豊様、藤原慧等様、大森孝様、森田登代子様達のお力をお借りしました。また、中西健之上様には、写真の複製をして頂きました。有難くお礼を申し上げます。

平成十年七月二十日



由良で毎年9月の秋分の日、戦没者の慰霊祭が行われています。

※付記 「宮津市戦没者名簿」の年齢が、数え年、満年齢、と、まちまちになっていました。尚、無理からぬことと思いますが、誤植もありました。

〔昭和六十年発行で、戦後四十年の作製になっています。〕

新宮涼庭 (一)

新宮 豊

五年間の長崎遊学から帰って、故郷で妻を迎えた。(三十二才) 涼庭は翌文政二年(一八一二)の春京都へ出て開業した。(室町通高辻南)

長崎において苦学数年蘭医直伝の涼庭の名声は、まもなく京都の蘭医家中屈指のものとなった。又、頼山陽とも親交があった。山陽が病で臥している時、主治医は小石元瑞であったが、しばしば涼庭を呼んで治療を受けていたようである。

文政六年シーボルトが蘭館医として来日した。そして、江戸参府紀行中に「新宮涼庭はヨーロッパ学問の大崇拜者にして、当地にて最も優れたる医師の一人なり。日本に於ける和蘭圖書の最大所蔵家として架蔵の図書は黄金三百枚に値する程なり」

と云う。このようにシーボルトによつて高く評価されている。

涼庭は京都で開業して約十年にして京都蘭医学界で名門の小石元瑞があつたが、涼庭は後進ながらこれらの名医に伍して門戸を張り、相扶けて京都蘭医学の黄金時代を築いた。そして其の名声が高まるにつれ大阪の鴻池家、京都の三井家と涼庭の病家として出入りし、鴻池の謝礼のみ歳費をまかなうに足り、他に年収二千五百両がある。年千両を得るものを千両医者というが、自分はかくの如くである。と門弟たちに語っている。かくして涼庭はかなりの蓄財家になつた。

天下は文政年間は終わり、天保年間へと移つて行つた。江戸幕府も元禄時代末より、財政面

も傾きはじめ各藩も凶作がつづき藩財政も窮乏をきわめ、財政の立直し、倹約の励行、殖産興業策の採用が大きな課題となつた。かかる社会情勢の中でその

蓄財を諸侯に用立て、理財家として、くづれゆく封建体制を補強する立場に立つたのである。

第一は越前藩との関係で、財政立直しは天保元年より弘化、嘉永の頃までつづいた。

第二は南部藩との関係で藩財政の立直しのため、盛岡に赴いている。

第三は鯖江藩との関係で、藩の用度を助ける為五千両を貸している。これらはいずれも諸侯の窮状をみかねて、救国の志を発し、「医国策」を献じたという。涼庭はたんに人を医するばかりでなく、国をも医する救国済民の考えがあつた。

天保十年(一八三九)京都南禅寺畔に順正書院を設立した。こ

も傾きはじめ各藩も凶作がつづき藩財政も窮乏をきわめ、財政の立直し、倹約の励行、殖産興業策の採用が大きな課題となつた。かかる社会情勢の中でその蓄財を諸侯に用立て、理財家として、くづれゆく封建体制を補強する立場に立つたのである。

第一は越前藩との関係で、財政立直しは天保元年より弘化、嘉永の頃までつづいた。

第二は南部藩との関係で藩財政の立直しのため、盛岡に赴いている。

第三は鯖江藩との関係で、藩の用度を助ける為五千両を貸している。これらはいずれも諸侯の窮状をみかねて、救国の志を発し、「医国策」を献じたという。涼庭はたんに人を医するばかりでなく、国をも医する救国済民の考えがあつた。

天保十年(一八三九)京都南禅寺畔に順正書院を設立した。こ

平春嶽、間部詮勝外)や文人(頼三樹三郎、篠崎小竹)外公卿(一条忠香前関白、久我建道中納言)等文人墨客が訪れている。

又、涼庭が医学に八科(生象学則、生理学則、病理学則、外科学則、内科学則、博物学則、化学学則、薬性学則)を分かち、系統的な教育を行つたが国医学教育史上特筆さるべき場所であり、名儒が書を講じて市民の教育向上に資した場所でもあつた「順正書院」と命名したのは江戸の大儒佐藤一斎で、正面玄関の額は京都所司代鯖江藩主間部詮勝である。

順正の意味は当時の儒学者(篠崎小竹、頼三樹三郎、佐藤一斎)がそれぞれ解釈をしているが、これらの文章を通じてうかがえることは、「学は順正によつて成り、風俗は矯正しうる。また正学を可とする、医もまた人体の自然に順うならば、健康を保持得、また病むも治が早い」という学医両面から説いている。

涼庭が出版した医学書は長崎で勉学中発刊したものもあるが、次の十書である。窮理外科則(原書ゴルトル)、人身分離則(同上)、泰西疫論(ヒュヘランド)、腐則疫論、解体則(ブレンキ)、外薬則(同上)、外科方府(同上)、小児前書(同上)、婦人科書(同上)、療治項言である。

次に涼庭は嘉永六年「驅豎齋家訓」を書いている。これは本人の遺言とも考えられるもので、十三ヶ条である。これは家人、子弟を教訓するために書いたものである。十三ヶ条を一言にしていえば封建制度の枠内において、完全な人間として生きる上の教訓を説いている。

涼庭は嘉永六年十月より体の不調をうったえ、体力衰弱し、安政元年一月没した。(六十八)

京都の新宮家は涼庭没後涼民、涼亭、涼男と四代医業をつづけ、由良は涼庭の妹に養子を迎え健蔵、仙蔵と二代医を業とした。

編集後記

今日(七月二十四日)家の近くの草むらで、キリギリスの鳴き声を聞きました。

「ギース」少しして又「ギース」。チヨンが鳴けないのか、梅雨のむし暑さにキリギリスもおかしくなつたのかな。なんて、早く梅雨が明けて海からの涼しい潮風が心地よく、木陰、家の中に入り込む日が待ち遠しい此の頃です。

今回発行の公民館だより一〇五号は平成十年度の公民館役員を紹介させていただいています。どうか今年もよろしくご指導・ご協力をお願い致します。

平成十年七月記

酒田

